講 評 速 報　　第　６　号

生徒講評委員会　発行

２０１６年１２月２４日（土）　１　校目　　岐阜県立瑞浪　高校

『　　はこをあけて　　』

これは、ある演劇部でたったひとりで活動をする少女が、部室の大掃除のために数多くのダンボールの箱のひとつひとつをあけて整理していく物語です。

題名に書かれている「はこ」という存在について、私たちの話し合いではたくさんの意見が出ました。一つ目はアイデアの箱である「はこ」。主人公の少女が劇中で「演劇やるのって、たくさんの箱に囲まれているみたい」と言っていました。それは性格、年齢、時代、それらすべての何にでもなれる、演劇がもつ自由な可能性を表現しているように感じられました。二つ目は先輩たちの積み上げてきたものである「はこ」。今回の舞台である、部室にあるダンボールの中に入っているものすべては、かつての演劇部員だった先輩たちの残していったものでした。最後に残された彼女がひとつひとつその箱を開けることによって積み上げられてきたものを振り返り、独りである今と独りではなかった過去の対比がわかりやすく、彼女の演劇を共にする仲間がほしいという気持ちがより伝わってきました。また、最後に箱を崩し、蹴飛ばした後の「ごめんね」という台詞に激しく胸が打たれました。廃部になってしまいもう無限にあるアイデアの箱を開けることができない、もっと上演したいのに一人では上演することができない主人公の悔しさや辛さが、同じ演劇部員の私にひしひしと伝わってきて、とても辛かったです。

私はこの劇のラストで主人公が言った「神々から送られた箱に、最後に残ったのは希望。だから。」という言葉がすごく印象に残りました。箱は、歴代の先輩たちが残したものではないかと考えたときに、「神々」とは歴代の先輩たちのことで、「希望」は歴代の先輩たちが彼女にくれた記憶や経験ではないかと考えました。部室にあるダンボールがなくなって、歴代の先輩たちが残してくれたものの形がなくなっても、彼女の心の中には記憶としてきちんと残っていて、それが発声練習を行う力の源になっているのでしょう。私には彼女の発声練習が彼女の、演劇がしたい、大会に出たいという心の叫びに聞こえます。私たちは当たり前のように上演できて、大会に出ることができます。その環境がいかに恵まれているのかに改めて気づかされました。

この劇は同じ演劇部員として他人事ではなく思えました。私たちは痛切に、演劇ができる今の環境を大切にしなければならないと感じました。